

子どもの見守り活動等お世話さまです 子ども安全リーダーを中心に

登下校の子どもたちの安全を確保するために、日々交差点や通学路に立って下さっている子ども安全リーダーの方や地域の方がたくさんおられます。子どもたちに「おはよう」、「いってらっしゃい」と声かけは勿論のこと、子どもたちが安心して登校ができるようにご尽力下さっています。「地域の子どもは地域で守るんだ」といった気概だけでなく、暖かさを感じます。見守り活動の様子は次の通りです。

みらい銀行の交差点では、岡村（子ども安全リーダー）さんと北村（交通安全下阪本支部）さんが月・水・金に、桜井（地域ボランティア）さんが毎日子どもたちを迎えて下さっています。また、日吉中学校前では、吉村（子ども安全リーダー）さんが毎日見守り活動を実施、そこに青木（民生委員）さんも加わってあいさつ運動を展開。山田（民生委員）さんも仲間入りし、日吉中学校の里道入り口で見守り活動を展開して下さっています。

また、下阪本郵便局横バイパスの交差点では、依田（子ども安全リーダー）さんが子どもたちの登校を毎日迎えて下さっています。そこに、三津川（民生委員）さんが仲間入り。このように見守り活動の輪が自然発生的に広がってきています。誠にありがたいことです。



そして、三村さんは安全リーダーの一線を引いた後も、毎日自宅前で子どもたちの登下校の見守りを続けて下さっています。子どもたちが三村さんに出会うと、「三村のおばちゃんや」と親しげに声をかけている光景をよく見かけます。一区でおばちゃんの顔や名前を知らない子どもは一人もいないのでは。

このように、子ども安全リーダーを中心に登校の見守り活動の輪が広がってきていますが、それは皆さんの善意によって実施されています。

翻って、子ども安全リーダー（上記の他、刀根・堀田・本多・真嶋を含めた7名）本来の活動内容とは何か。一つ目は、下阪本学区地域安全連絡会の活動団体として、地域の子どもたちを見守るため、大津警察署長から2年間委嘱を受けて、月2回1年生を対象に下校時の安全パトロールと見守り活動の実施。加えて、1年生が入学して1週間は、特別に1年生を朝の集合場所まで一人ずつ通学路の確認をかねて見守り活動を実施。

二つ目は、「子ども110番のおうち」の黄色い表示コーンの設置と維持管理。通学路や公園周辺などで子どもが被害に遭いそうになったとき、助けを求めて駆け込める場所が「子ども110番のおうち」です。また、表示コーンの一部には夜間も点灯するものがあり、防犯灯の役割も果たしています。

三つ目は、小学校と幼稚園にて大津署と合同で防犯教室を開催。寸劇を交えながら、児童や園児が不審者や変質者から身を守る方法、つまり、「誘惑にあわないための5つの約束（一人で遊ばない。知らない人にはついていかない。連れて行かれそうになったら、大声で助けを呼ぶ。誰と、どこで遊ぶか、何時に帰るのかをおうちの人に言って出かける。お友達が連れて行かれそうになったら、大人の人にすぐ知らせる）」を教えて下さっています。



子ども安全リーダーの方をはじめ、子ども見守り隊の皆さまは、日々縁の下の力持的な役に徹し、安心安全な街づくりの一角を担って下阪本学区を支えて下さっています。ありがとうございます。これからも地域の宝物である子どもたちの見守りをよろしく願っています。



瓦渡来 1400 年の伝統の技 美濃邊鬼瓦工房：鬼師美濃邊哲郎氏にお聞きして

伝来の手作り製法にこだわり、変わることなく鬼瓦の製造を手がけてこられた美濃邊鬼瓦工房。神社仏閣などの屋根瓦の中には特別な意匠をこらした鬼瓦があります。心血を注いでそうした鬼瓦を作りあげる職人のことを鬼師といいます。美濃邊哲郎氏はそうした鬼師の一人で、文化財の復元を通じ、江戸時代の職人の心意気や凄みを感じると言われています。

そもそも鬼瓦は水の浸食を防ぐ瓦屋根の「雨仕舞い」としての役割を担っているといわれます。「雨仕舞い」は、「あまじまい」と読み、家の中に雨水が入らないようにすることをいい、その中で鬼瓦は、「瓦葺きの屋根の端などに設置される装飾性のある瓦の総称。略して『鬼』ともいわれる。厄除けと装飾が目的のものが多い」（ウィキペディア「鬼瓦」とされます。この点で、鬼瓦はむしろ機能性よりも装飾性を重視したものであるといえます。

ところで、江戸時代、大津には瓦の産地として名をはせた『松本瓦』がありました。これは、逢坂山あたりで瓦に適した良質な粘土が採れたため、瓦作りの職人が多くいたこと、また近くに神社仏閣が多数あり、船で輸送するのにすぐれた良港（京阪電車石坂線「瓦ヶ浜駅」はこれに由来）に恵まれたことに依ります。明治時代になると、一般の住宅にも瓦葺きが認められ、瓦の需要が高まり、現在の尾花川、下阪本、仰木、衣川、堅田などで瓦の製造が盛んに行われるようになったようです。しかし、大正・昭和時代になると瓦の輸送手段も多様になり、三州（愛知県）や淡路から大量生産された瓦が安価で入るようになり大津の瓦製造業者は激減したそうです。平成、令和になると住宅事情が大きく変わり、洋風建築の普及によって瓦の需要が少なくなっています。

ところで、美濃邊鬼瓦工房の特徴は鬼瓦を形作る土から、焼き・いびしの作業まで伝統的な製法を守りながらすべて手作業で行っているところであり、まさに瓦渡来 1400 年の伝統の技を現在に伝えられているといえます。その精神・心を守り続けられたから、今まで生き残れたのだと。ちなみに、大津で瓦を製造しているのは美濃邊鬼瓦工房だけだそうです。



東南寺：割れた鬼瓦を新しく復元

美濃邊氏は、「文化財の復元にあたる時、昔の人が何を思っていたかを想像することが大切です。300 年や 400 年前の鬼瓦を目にしたとき、手が

動かなくなったことがあります。同じものを作ろうとしているのに作れない。これを作った職人さんはすごいと思うことがよくあります」と話され、最後に、「瓦業者激動の時代を経て今に至るわけですが、大津最後の瓦製造業者としてこれからも手作りにこだわり、心を込めて瓦を作っていきたいと思います」と、熱く述べられていました。



来迎寺：客殿鬼瓦

美濃邊氏に、「文化財の復元にあたる時、昔の人が何を思っていたかを想像することが大切です。300 年や 400 年前の鬼瓦を目にしたとき、手が動かなくなったことがあります。同じものを作ろうとしているのに作れない。これを作った職人さんはすごいと思うことがよくあります」と話され、最後に、「瓦業者激動の時代を経て今に至るわけですが、大津最後の瓦製造業者としてこれからも手作りにこだわり、心を込めて瓦を作っていきたいと思います」と、熱く述べられていました。

激動の歴史を見届けてきた証や縁起を募集！・・・湖都通信に掲載

下阪本は延暦寺の門前町として、政治的・経済的な役割を担う街として栄え、激動の歴史を見届けてきました。いわば、下阪本は歴史の宝庫であり、その証や縁起が眠っていると思われま。それを湖都通信に掲載したいと考えています。我が街の言い伝えや縁起を教えてください。真嶋までお願いします。